

第12回 アメリカから中学生がやってきた



10年以上前のことです。

米国の企業に勤める長男とその家族が、
全員の米国ビザの書き換えのためにわが家に数週間滞在しました。

2人暮らしのわが家に、
一気に長男、長男の妻、中学2年生と小学2年生の男の子たちの4人が加わりました。
中学生と小学生の孫はすぐに近くの市立学校に通い始めました。
2人とも教育はアメリカで受け、日本の学校はほぼ初めてでした。

さて、一家のビザの更新が完了して帰米の日程調整をしていた頃のことです。
自我が芽生えて、自分の独立心を試したかったのか、
中学生の孫は帰米せずに日本に残りたいと言い出しました。

両親は彼の希望を受け入れました。
とはいえ、まだ中学生です。何をしでかすかわからない。
ということで「五か条の御誓文」よろしく、
これを破ったら即刻帰米となる「掟集」をしたため、
それを中学生の息子に渡して帰って行きました。

今回は、中学生の孫が見た日本とアメリカの学校教育に関するお話です。

第1弾。

中学校で、クラス対抗の音楽会が近づいたころのことです。
彼のクラスでは、演奏曲目が決まり、練習も始まっていましたが、
指揮者がまだ決まっていませんでした。
明日のクラス会で指揮者を決めると聞くや、
彼は、帰宅後ユーチューブでクラシック音楽の動画を視聴し始めました。

翌日のクラス会で、彼は、何のためらいもなく指揮者になりたいと立候補しました。
アメリカのクラスには同調圧力が無く、
自分の考えを主張することが高く評価されます。
今回の彼がとった立候補もその一つです。

こうした自主的な行動がうまくいった時の成功体験は、本人のやる気をさらに上げ、これが自信となって次の成功を呼び寄せるのだと思います。彼の場合も、これまでアメリカの教育で積み重ねた成功体験が、異国での立候補を後押ししたのでしょう。教育の基本は、自発的な活動で得られる成功体験に基づく「やる気回路」の樹立だと確信しました。

後日譚ですが、対立候補がいなかったのか、彼が音楽会でタクトを振ることになりました。そうと決まってからは、毎晩夜遅くまで動画を見聞きしては、熱心に指揮棒の振り方を練習していました。



クラシック好きの私も夫も、最初の頃は、自信過剰で立候補ただけで、実際には出来ないのでは、とヒヤヒヤしながら練習を見ていました。が、練習するにつれて彼のしぐさがだんだんサマになっていくのに驚きました。あたかも音楽を先導しているような、全身を使った指揮振りに、びっくりしました。

残念ながら、彼のクラスは優勝できませんでした。本人は、地団太を踏んで悔しがっていましたが、多分、「俺のせいで負けた」とは思っていなかったと思うよ。

第2弾。

彼は、家族と離れて一人になっても、泣き言も言わずに中学校に通い続けていました。そんなある日、彼がクラスを批判し始めたのです。

曰く、生徒たちは先生を馬鹿にしている、クラスがうるさい、クラスには変な平等意識が蔓延している、みんなと異なった意見を言うと変な目で見られる…、と。

アメリカで通っていた公立学校のクラスでは、授業は静かで、正当な理由が無い限り学生は先生に従う、けど、自分の意見は自由に言えた…、と。

私と夫は「アメリカでは自分の意見は自由に言えた」は納得しましたが、前半の文言にはびっくりしました。想定していたのと反対だったのです。

私たちが小中学生の頃（1960年代）は、儒教の残滓のためか、上から目線の「先生を敬いなさい」が学校の標語の一つでした。ですから、小学校では先生の言うことを聞き、授業は静かでした。もっとも、先生の力量を判断できる中学生や高校生になると、ダメな先生を敬うことはありませんでしたが。

一方の、「アメリカでの授業は静か」と
「正当な理由が無い限り学生は先生に従う」は、
先生の人柄や力量を評価して、
生徒が主体的に先生を尊敬に値すると判断した結果の行動なのかもしれません。

それでは、孫が通った日本の中学校のクラスがうるさく、
先生に対する尊敬が無かったのは何故なのか。

単に古い儒教の教えが消滅したからか、
あるいは他の原因があったのか、謎です。

そんな孫も、家族が恋しくなったのか、
数カ月もするとアメリカに帰って行きました。

彼に水を浴びせられ、追いかけて廻された飼い猫は、
彼がいなくなるや、
「快哉！」と雄叫びを挙げたとか。

